

熊本市域の校区における 「どんどや」の開催と櫓づくりの実態

市川 薫

熊本市都市政策研究所 研究員

キーワード：どんどや、どんど焼き、校区、アンケート、地域づくり

1. はじめに

熊本市域では、毎年1月に各地で「どんどや」と呼ばれる行事が開催されている。これは小正月の火祭り行事であり、その年の健康を祈り、竹や木で組まれた櫓を正月飾りと共に燃やすものである。同様の行事は全国各地にみられ、「どんど焼き」の名で広く知られる伝統的な年中行事の一つであった。「どんど焼き」は、正月に迎えた神を煙にのせて送る行事とも考えられている（齊藤，2012）。しかし、高度経済成長期以降、多くの伝統的な年中行事とともに衰退したり内容の変化がみられている（石井，2020；谷口，2017）。

筆者は既に熊本市域のどんどやを対象として現地調査等を行い、以下のようなことを明らかにした（市川，2021）。市域の現在のどんどやには、小正月の開催¹や子どもの主体的参加といった、かつて（昭和40年代以前）のどんどやにみられた基本的特徴は失われており、開催の単位や運営、行事内容などの点において多様化している。開催単位には様々なスケールのもの（隣保班、自治会、校区、それ以上）があり、例えば小規模な隣保班単位によるどんどやは、農村部の古くからのコミュニティが維持されている地域でみられ、櫓の材料調達などに昔からの風習もみられる。一方、校区単位のどんどやは市街部で多くみられ、様々な地域団体が運営に携わり、行事には飲食物の提供や昔遊びの伝承などの新たな要素が追加されている。

本稿では、市域の都市化による地域コミュニティの変容に着目し、校区単位で開催されている「どんどや」に調査対象を絞った。そして、解明すべき実態の内容から開催主体の意向を含む詳細を把握する必要があることから、アンケート調査を実施することとした。

2. アンケート調査の実施概要

アンケート調査は、令和2年に校区単位で開催されたどんどやのうち、主催団体代表者の連絡先が判明した37か所を調査対象とし²、33か所から回答を得た。調査概要は表1のとおりである。アンケートでは、どんどやの開催概要、櫓の準備、意義・課題等、幅広く質問したが、本稿では主な項目についての結果を示す。なお、以下の結果のグラフにおいてサンプル数（N）を特に示していないものは、全てN=32である。

表1 アンケート調査の概要

調査対象	熊本市内において、校区でどんどやを開催した主催団体のうち、連絡先の判明した37団体の代表者。
実施時期	令和2年12月10日～令和3年1月15日
調査方法	郵送による配布・回収
回収状況	回収数33票 [*] （うち雨天中止の1票については一部の質問にのみ回答） 回収率89%
内容	令和2年のどんどやの開催概要、櫓の材料調達・組立て、費用、その他（意義、課題等）

※単一校区での開催…30、2校区共同…2、3校区共同…1

3. 結果

3.1 開催概要

どんどやの開始時期は、早いところでも1970年代（約15%）であり、最多は2000年代（約18%）だった（図1）。市域の地域史や民俗調査資料等の文献資料には、昭和40年代以前のどんどやに関する記述が多いが（市川，2021）、校区単位のどんどやは比較的新しいことが分かった。開催場所は小学校の校庭が最も多く、中学校も含めると約6割を占めた。すべてのどんどやで、開催日は1月11日（土）～13日（月・祝）もしくは18（土）～19（日）のいずれかであり、前者が8割弱を占めた。従来どんどやは小正月の行事で毎年1月14日に開催されていたが、現在は全箇所固定日ではなく土休日に実施されていた。

熊本市域の校区における「どんどや」の開催と櫓づくりの実態

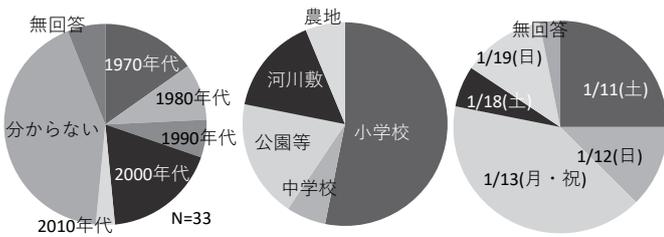


図1 開始年代 図2 開催場所 図3 開催日

どんどやを主催しているのは、校区自治協議会やPTAが多く、両者で7割近くを占めた。他には青少年健全育成協議会、まちづくり委員会、自治連合会などがあった(図4)。また、上記の団体に加え、消防団、町内自治会、小学校、交通安全協会など、多様な地域団体が運営に参加していた(図5)。参加人数は101人から500人が全体の約2/3を占め、1000人といった大人数のどんどやもあった(図6)。校区のどんどやは様々な地域団体の協力の元で運営され、多くの住民が集うイベントになっていることが分かる。

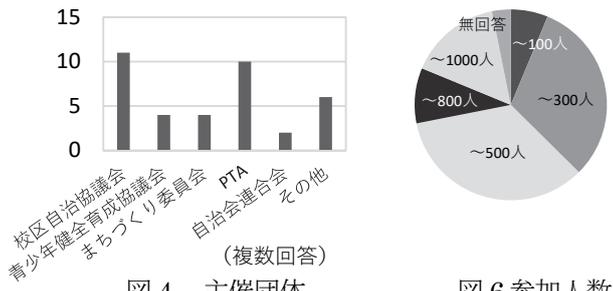


図4 主催団体 図6 参加人数

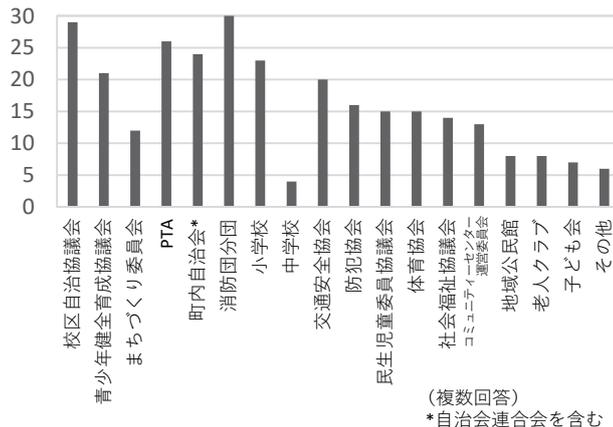


図5 運営参加団体

行事の内容としては、どんどや本来の中心的な要素である「櫓の点火・燃焼」や「残り火での餅焼き」に加え、9割以上のどんどやで「飲食物の振舞い」あ

るいは「販売」が行われていた。さらに約1/3にあたる10か所³のどんどやでは、「抽選会」、「昔遊び」、「綱引き」、「伝統芸能」、「ゲーム」といった従来のどんどやにはなかった内容も含まれていた(図7)。

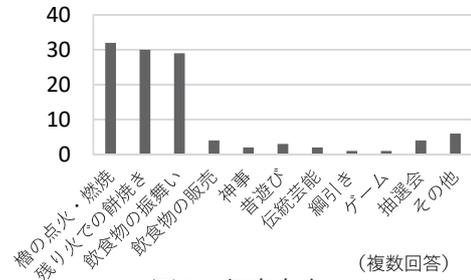


図7 行事内容

3.2 櫓の材料と調達

どんどやの中心となる櫓には、骨組みをはじめとする主材料として竹が使用されることが一般的だが、アンケートからも調査したすべての校区で竹が使用されていた(図8)。一方で、従来は広く使用されていたと考えられる藁の使用⁴は5割にすぎなかった。逆に、従来は使用が一般的でなかったと考えられる剪定枝の使用⁵は約6割に及んだ。その他には雑木やメダケの使用も多かった。また、櫓を固定するのに縄や番線・針金が使用されていた。

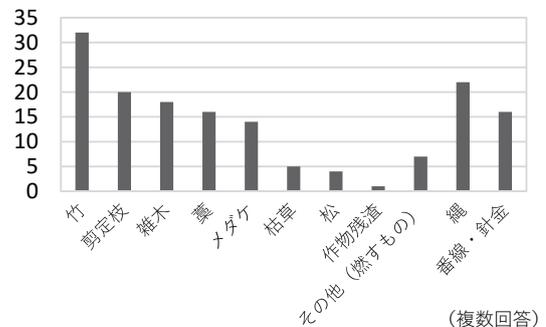


図8 櫓の使用材料

竹の調達について、8割近くのどんどやでは竹林から直接採取されていたが、2割近くは購入や業者を通じた調達がされていた(図9)。竹林から直接採取したところでは、作業を担ったのは地域団体が多かった(図10)。具体的には消防団の参加が最も多く、他にもPTA、町内自治会をはじめ様々な団体が参加していた(図11)。かつてのどんどやでは子どもが材料の調達を担うことが多かったが(市川 2021)、今回のアンケートからは地域団体が担っており、大人中心の材

料調達であったことが分かる。作業人数は 11~20 人が全体の 4 割以上を占めていた (図 12)。

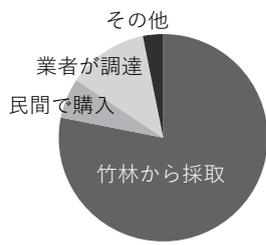


図 9 竹の調達方法

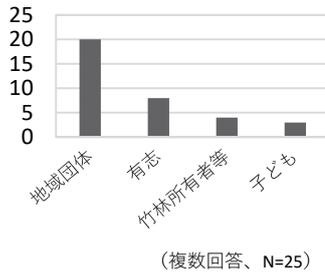


図 10 作業した人

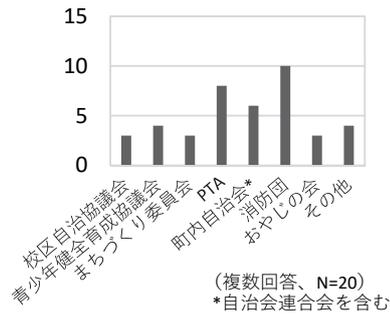


図 11 作業した地域団体の種類

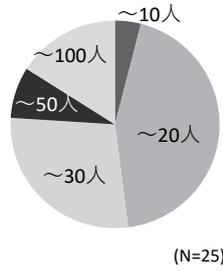


図 12 作業人数

3.3 櫓づくり

櫓の組み立て作業についても、竹の採取と同様に、地域団体が担っているところが多かった (図 13)。子どもの参加は 4 か所と少なく、2 か所では業者に委託されていた。具体的な団体としては、PTA や消防団が多かった (図 14)。作業人数は 30 人以上が 7 割近くを占めた (図 15)。

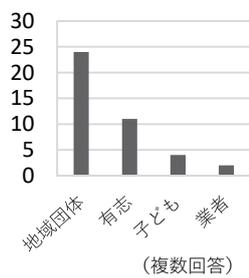


図 13 作業した人

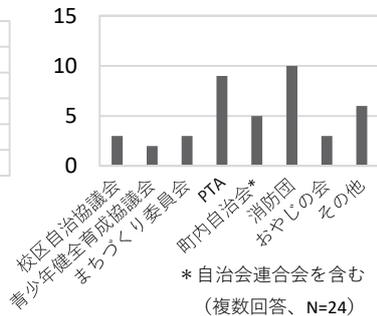


図 14 作業した地域団体の種類

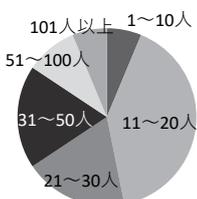


図 15 作業人数

櫓の高さは 5m 以下から 15m~20m 以下と様々だった (図 16)。骨組みも含め使用した竹の本数は、10 本以下から 101 本以上までばらつきがあり、11~50 本が全体の半数強を占めた (図 17)。なお、重機の使用について、約 3 割でユニック車/クレーンやショベルカーが使用されていた。

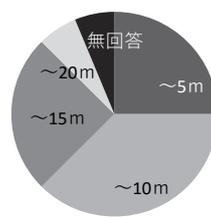


図 16 櫓の高さ

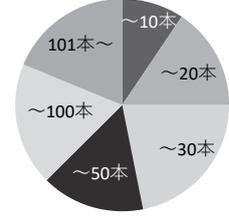


図 17 竹の使用本数

3.4 櫓づくりに関する費用

櫓づくりの費用⁶について、材料の調達にかかった費用 (図 18) や、機材・車両手配 (図 19) では、1 万円~5 万円のところが 1/4 を占め最も多かったが、費用が全くかかっていないところも 2 割前後あった。業者への委託費が発生していたのは全体の 1/4 程度だった (図 20)。合計としては、半数以上が 5 万円以内で櫓づくりをしていた (図 21)。

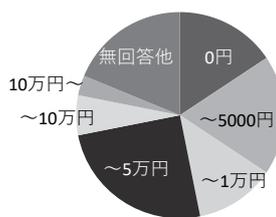


図 18 材料調達費 (購入・謝礼等)

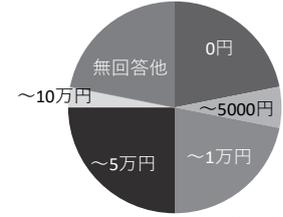


図 19 機材・車両費 (レンタル・謝礼等)

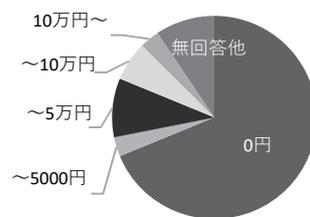


図 20 業者への委託費 (材料調達・櫓づくり)

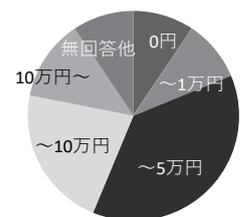


図 21 費用 (合計)

3.5 どんどやの意義・課題等

どんどやを開催する意義としては、「住民の交流の活発化」、「地域の一体感の向上・愛着の増加」、「地域団体の活動の活発化」といった地域づくりに関する項目や、「文化伝統の継承」が多く選択された(図 22)。一方これらと比較すると、どんどや本来の目的である「豊穡や無病息災の祈願や神送り」は少なく、半数程度だった。課題としては、灰の飛散への苦情など「近隣との関係」が突出しており約 7 割に上った。他には「運営ノウハウの継承」や「櫓づくりの技術の継承」といった行事の継続性に関する課題が選択されていた(図 23)。

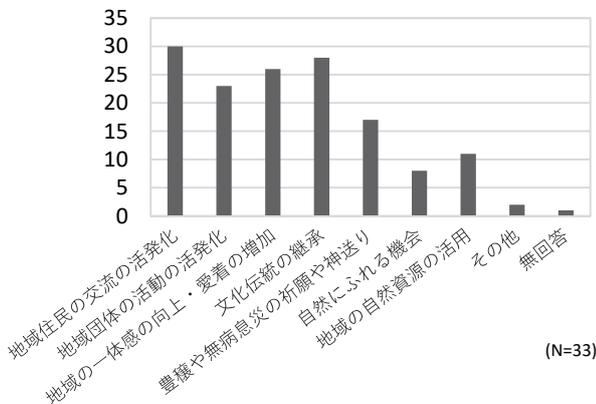


図 22 どんどやを行う意義

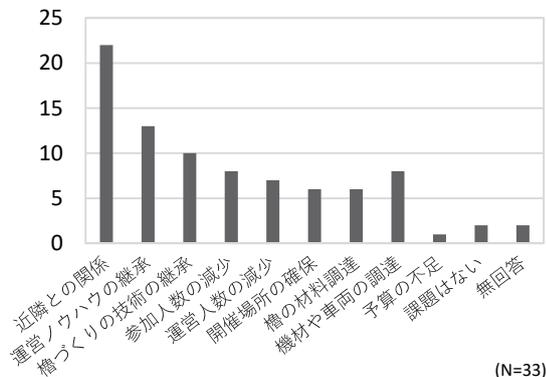


図 23 どんどやの課題

4. まとめ

4.1 昭和40年代以前のどんどやからの変容

① 開催日の変化

回答のあった全てのどんどやにおいて、開催日はかつてのように固定した日ではなく、週末の開催となっていた。どんどやが小中学校の校庭で開催されているケースが多いことや、人数の多い勤め人の都合を考えれば平日の開催は現実的とはいえず、週末の開催とな

っているものと考えられる。

② 子どもの主体的参加の欠如

かつてのどんどやの大きな特徴の一つであった子どもの主体的な参加は、現在では見られなくなっていた。市街化が進行しライフスタイルも変化する中で、竹などの材料は身近ではなくなり、調達先の手配や運搬、作業の安全性など様々な点において、子どもが中心になるには困難が予想される。材料(竹)の調達は現在、消防団や PTA、町内自治会など大人中心に行われている⁷。

③ 行事内容

かつてのどんどやは、櫓を作って燃やし、残り火で餅焼きを行うものだった。しかし、現在はそれに加え、ぜんざい等の飲食物を別途準備したり、昔遊びの伝承やゲームといった、新たな要素が追加されたものになっており、参加者の娯楽的な要素が増えているといえる。

④ 櫓の材料の変化

櫓が竹を主材料とすることは従来と変わらなかった。しかし、農地減少や稲の刈り取り方法の変化によって、調達が難しくなった藁の使用は減少し、市街地でも多く発生する剪定枝の利用が一般的になるなど変化がみられた。

4.2 現代のどんどやの今日的意義と課題

① どんどやの実施主体と行事の性質

現在、校区のどんどや開催は、校区自治協議会や PTA など多くの地域団体の協力の元で組織的に運営されており、数百人が参加し楽しむ地域の一大イベントという性質のものとなっている。

② 地域づくりとどんどや開催

どんどやの意義については、地域づくりに関する項目が多く認識されていた⁸。どんどやの開始年代は早いものでも 1970 年代で、2000 年代以降のものも多く、比較的最近だった。校区単位のどんどやは、伝統的などんどやの要素(櫓の燃焼等)を取り入れつつ地域づくりを意図した新たな行事とも捉えることができる。

② 開催上の今日的課題

市街化が進行した地域での開催は、灰の飛散への苦情など「近隣との関係」に多くのどんどや主催者を悩ませる結果となっている。また、今後自然との接点が

さらに少なくなるに従い、櫓の材料調達や櫓づくりの技術の継承が難しくなっていく可能性も考えられる。さらに新型コロナウイルス感染症の影響による行事開催自体の一時中断⁹等により、今後運営ノウハウの継承に課題が生じることも懸念される。

謝辞

本調査にあたり、アンケートに応じていただいた主催団体代表者の皆様に感謝申し上げます。また、アンケートの実施にあたり協力いただいた熊本市の各まちづくりセンターにも感謝申し上げます。

(参考文献・資料)

- (1) 石井研士 (2020) 『日本人の一年と一生』 春秋社。
- (2) 市川薫 (2021) 熊本市域における「どんどや」の現状と今日的意義。熊本市政策 7, 44-57。
- (3) 齊藤純 (2012) どんど焼き。田中宣一・宮田登編『三省堂年中行事事典』三省堂, 137-139。
- (4) 谷口貢 (2017) 年中行事研究の歩み。谷口貢・板橋春夫編『年中行事の民俗学』八千代出版, 29-48。

¹ 市域のほとんどのどんどやは、かつて1月14日に開催されていた(市川, 2021)。

² 事前調査から対象とした校区単位のどんどやは40あったが、代表者連絡先が不明なものが3あったため、送付数は37となった。

³ 「抽選会」、「昔遊び」、「綱引き」、「伝統芸能」、「ゲーム」のうち一つでも行われているものを合計した。

⁴ 統計的な記録ではないが、「熊本市内の年中行事調査報告」(熊本市教育委員会編, 1983)では、材料についての記載のあった17か所の調査地のうち、少なくとも7割にあたる12か所で櫓に藁を使用しており、藁の使用は広くみられたと考えられる(市川, 2001)。

⁵ 「熊本市内の年中行事調査報告」(熊本市教育委員会編, 1983)では、櫓の材料として剪定枝が使用された記載はなかった(市川, 2001)。

⁶ 費用は「材料費」、「機材や車両手配」、「業者への委託費」の3項目に分けて質問した。複数項目が合算された回答については、結果を「合計」にのみ含め、各項目では「無回答他」に含めた。また一部項目が空欄の場合は「0円」と解釈したが、3項目ともに空欄であったところについては判断がつかなかったため「無回答」として扱った。なお、飲食関連費用等の櫓以外の費用については、記載があっても上記には含めていない。

⁷ アンケートでは、2割近くが購入や業者を通じて竹を入手していることも分かり、大人でも材料を自分たちで調達するのは必ずしも容易でないことが窺える。

⁸ 同じ質問では「文化伝統の継承」も多く選ばれていたが、本文中で既にみたように、実際のどんどやは伝統に忠実な行事としてではなく、現代のライフスタイルや地域の状況にあわせて変化している。

⁹ 令和3年度のどんどやの開催予定についての質問では、8割以上が新型コロナウイルス感染症の影響により開催見合わせ予定となっていた。

